

編集後記：見知らぬ人と話をする時にまず話題にするのは天気の話である。「今日は良い天気ですね。良く雨が降りますね。」など、話のきっかけをつかむのもってこいである。竜巻、台風、梅雨末期の集中豪雨、猛暑、などなど気象関連のニュースが連日マスコミで取り上げられている。天気予報もニュース番組の終わりに必ずあり、人々にとって天気は身近な存在である。

気象学を専門にする者にとってはこのように世間に広く認知され、関心を持ってもらうことはうれしいことである。それでは天気に関してどの程度の関心があるのか？は各人各様であろう。雨の予報は特に関心が高い。洗濯物を外干してよいかどうか、外出時に傘を持って行く必要があるか否か、などは身近な行動の意思決定のための重要な情報である。夏は特に気温に関心を持つ人が多い。夏になると、今日の最高気温はどこで摂氏何度を記録した、と報じられ、街の様子や人々のインタビュー、果ては動物園の動物たち（特に寒冷地育ち）までもが映し出され、こんなにも暑かった、と強調する。今年は節電・省エネが一般の人々にも浸透してきたため、エアコンの設定温度を高めにしたたり、より電気使用量が少ない扇風機を使う人が増えている。昔ながらの団扇・扇子であおぎ涼を求める

人の姿も見られる。屋外で作業する人にとっては最高気温の予報はとりわけ重要である。作業中に本人が気付かぬまま熱中症にかかり倒れてしまうと命に関わる。

気温とは別に体感温度という用語がある。これは「温度・湿度・風速・日射などによって、人が体に感ずる暑さ・寒さの度合いを数値的に表したもの（広辞苑）」である。気象学的に言うとは皮膚の熱収支で決まる表面温度のことである。人が感じる温度は体感温度である。扇風機に当たると涼しく感じるのは風の温度と体温（ $\sim 36^{\circ}\text{C}$ ）との温度差によって顕熱が大気に輸送され、皮膚表面温度を下げる、汗腺から汗が出て蒸発の潜熱で表面温度を下げる、の両者の作用による。しかし、猛暑日（日最高気温 35°C 以上）の時は大気から皮膚表面に顕熱が輸送されるようになるので風が吹くとかえって暑く感じる。また温度が低くても湿度が高いと発汗による潜熱冷却作用が弱くなり体感温度は下がらない。気温と体感温度は違うので同じ気温でもその他の条件が異なれば暑く感じたり、涼しく感じたりする。熱中症の予防法に体感温度を下げる方法が載っている。まだまだ残暑が続くので体感温度を下げて快適に過ごしたい。

（萩野谷成徳）